原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第11号

CO患者・孝しゃんの現状

果して明日があり得るか

ケイレンで大腿骨が折れた

植物人間

「一酸化炭素中毒症（失外とう症候群）診断所見。

当人は頭書の症状で、当科に入院加療中。広範な中枢神経系の障害を呈し、意志による行動は不可能であり、植物人間に近い状態であることを認める」

熊本大学医学部附属病院（熊本市本荘一丁目）第一内科医師、鹿井禎二主治医から、この非情な診断をくだされたCO患者（一酸化炭素中毒患者）が二人いる。一人は、だれでも知っている重症患者の宮島重信君で、他の一人がここにいう愛川孝（たかし）君である。

孝君は、愛称が「孝しゃん」。職場や地域のなかまたちから殊のほか親しまれていたが、今は宮島重信君につぐ重症のCO患者として、あの日以来同病院の第一内科病棟のベッドのうえに、完全に人間の意志を失った無惨な体をさらしている。

第一内科の病棟といえば、コンクリート七階建て。見るからに近代的な建築。孝しゃんの病室は、その四階の四百五号室。

眼下に白川の流れ。デパート、新聞社、国の諸機関などの高層建築物が集中して建ち並ぶ熊本市の中心街をへだて、真向かいの、うっそうと巨木の茂る森のうえに、熊本城の本丸がそのいらかを秋陽に輝かしながらそびえる。窓からのぞむ眺めは雄大。そんな素晴らしい眺めも、孝しゃんの世界とは何の関係もないが。

孝しゃんは、三川鉱大爆発で被災したとき二十才だったから、今年三十才。

何がなし、うつろな感じこそぬぐえないものの、ベッドのうえに横たわっている孝しゃんの目もとはあくまで涼しく、眉目秀麗。この人がほんとに重症のCO患者なのだろうか、とだれしも一度は疑いたくなる。たとえ、「すっかり言葉を忘れてしまった」「あの日以来、お尻にはおむつを当てどうし」と聞いても、人びとはまだ信じられないに違いない。だが、孝しゃんはまぎれもなく〝植物人間〟の一人なのである。

あの三池闘争のときの孝しやん。まだまだ子どもらしさがぬけきっていず、これが若い闘士だつたとはとても信じられない。（後列向つて左から2人目）

今は、熊大附属病院の、第1内科のベツドのうえに、植物人間といわれる体を横たえているばかりの孝しやんと、どうしようもない母親のミヨさん。

宿縁のヒモ

母親ミヨさんは満六十四才。さぞかし美人だったと思われる、若い頃のおもかげを残しているせいか、としよりもぐんと若く見える。でも、介抱生活十年間の労苦は、ミヨさんの健康を手痛く傷めつけた。「体が弱りました。私のいなくなったあと、これのめんどうを果たしてだれが見てくれるかそれが心配で…」と、ミヨさんはそっとエプロンのスソで目がしらをおさえる。

すでに夫の悲知さんに先立たれ（昭和三十六年に死亡）、ひとり娘の栄子さんは他家へとつがせてしまったミヨさんにすれば、孝しゃんはそれこそかけがえのないひとり息子のはずである。

この空の下で、親ひとり子ひとりという切ない宿命の不思議さ。この親子を、人の目には見えない美しくて強じんなヒモが、しっかりと結びつけている。

孝しゃんの中枢神経のどこかにかすかながら生存し続けている細胞があるのだろう、私たち第三者には絶対にわからぬ、怒り、悲しみ、よろこび、満足など、孝しゃんに残された感情のか細い起伏が母親のミヨさんにはビンビン伝わってくるのだ。

孝しゃんは孝しゃんで、母親ミヨさんの手からでないと、たとえどんなに好物のスイカやトマトなどさえ、絶対に食べようとしない。いやそれどころか、ガチッと歯をかみ合わせてしまって、口を開くことさえしない。

ミヨさんは、「夜眠る時間がきましても、私が自分の顔をながめさせてやっておきませんと、寝つかんのですよ。ときには、長い時間これの手をさすってやっときませんと、眠ってくれないのです。ほんとに妙です」、ともいう。二人を、目に見えないどこかで固く結びつけている宿縁のヒモの美しさ、不思議さ。

ケイレン

こんな孝しゃんに、「これでもか、これでもか」と、今もひっきりなしに恐ろしいケイレンが襲いかかってきては、さんざんその体を傷めつける。

そのたびに孝しゃんは全身を硬直させ、両脚は棒か何かのようにつっぱり、両腕は、そのために筋が切れはしないかとおろおろするほどギューッとひきつけ、両眼はつりあがり、得体の知れぬ修羅の責め苦と闘う。それも、昼間やってくるか、真夜なかにやってくるか、まったく予測されず、ミヨさんは、たとえ夜なかでもおちおち眠ることができない。いずれにもせよそんなときは、「弓なりにのけぞるこれの体を、ただおさえつけておくほかありません」と、ほとほと語るミヨさん。

ケイレンといえば、昭和四十二年一月のあるころ、そのために思いも及ばない出来事が起きた。

朝だった。ミヨさんはまったくいつもの日同様、孝しゃんのおむつを取りかえてやろうと思い、まったく自由にならぬ彼の重いお尻をかかえあげようとした。

そのとたん、孝しゃんが突然大声をあげたのだった。「おとったんですよ」、とミヨさんはいう。だからといって言葉を忘れてしまった孝しゃんが、そのとき何をうったえているのか、わかるはずはなかった。ただ彼の体内で、ただならぬ変化が生じていることだけはたしかだった。主治医も首をかしげ、さっそくレントゲン写真を撮って見たところ、主治医もミヨさんも、余りのことに開いた口がふさがらなかった。

それはむごたらしいものだったとミヨさんはいうが、明げたばかりの晩に孝しゃんを襲った猛烈なケイレンのために、あの太い、右脚の大腿骨が、その真んなかほどからぽっきりと折れていたのであった。

初出勤

昭和三十四年十二月のこと、孝しゃんは、すでに世を去った父親忠知さんと入れ替え採用となり、三井鉱山に入社。中学を卒業したばかりのこと、その年令に達していなかったため坑内で働くことができず、三川鉱の坑外で働くことになった。ところがおどろいたことに、初出勤のその日もう孝しゃんは、会社の〝首切り合理化〟のたくらみに抗議して、三池労組が行った鉱業所前における座りこみに参加したのだった。

その日は、三池主婦会も三池労組を助けるために会員を大動員。ミヨさんも主婦会員の一人として主婦会のハチマキをきりりとしめいち早く鉱業所にかけつけたところ、はからずもそこに息子の姿を見出したのだった。

「『わあ、どうか。むぞらしか（可愛らしい、の意味）人ン座っとりなはる。ホラ』――なかまの主婦たちがさかんに指さすあたりを見ましたところが、ほんとにびっくりしました。これがにこにこ笑いながら私に手をふっとったのですよ」、と語るとき、ミヨさんの表情が思わずほころぶ。

孝しゃんは、ひき続き三池闘争に参加。可愛いらしい行動隊員としてかけまわったが、子どものころから、走るのが早いことで注目を集めた。学校の運動会では、いつも一等賞ばかり。三井鉱山に入社して三池労組員になると、こんどは大地評駅伝などに走っては、人びとを頼もしがらせた。

孝しゃんは、まわりの人びとから愛された。大人ばかりでなく、子どもたちからさえも。

親思いでもあった。幾分でも家計の足しになればと思い、ミヨさんは身につけた技能を生かして和裁の内職をやったことがあるが、孝しゃんは、「そげんせんなら暮らしにこまるとね。体に悪いよ」と心配してくれ、そしていったという――「もう、母さんには心配かけんよ。楽しませてやるが」。

「それが、こんな姿になってしまって。この子が、ああいってくれたときのうれしかったことばかりが、生涯忘れることができません」、と述懐する母親ミヨさんの両眼からふき出す涙は、いつまでもとどまることを知らなかった。

ひとっこと

生れつき、秀でた目鼻だち。人びとから愛され、スポーツ好きだった彼。そして、親思いだった孝しゃん。目くらむばかりの青春期を迎え、すべてはこれからだった孝しゃんの人生と夢を、無惨にも二十才のときもぎとった奴はだれか。

「私は口が不調法ですからうまくいえませんけど、資本家はもう少しどうにかならんもんでしょうか。何かありますと、労働者はすぐとがめられますのに、たとえどんな災害をひき起こしても資本家は悠々でしょう。ほかのことについては申しませんが、保安の問題だけは、資本家も働く人たちと一心同体となってやるべきだと思います。今のままでは、労働者は余りにもひどすぎます。私は、このひとことをいいたいとうございます」

ミヨさんはこういう。それにしても孝しゃんに、明日のあり得る日が果たしてくるかどうか。まだ三十才という若さだが。